

本校が目指す5年後の姿（具体的な目標）

① 学校の現状や課題

[現状]

本校は平成30年に創立120年を迎えた県内屈指の伝統校である。文武両道を教育方針として掲げ、県内はもとより国内外において各界のリーダーとして活躍する人材を輩出している。地域には、本校の教育活動に理解を示し協力的な保護者や同窓生も多く、地域から厚い信頼を得るとともに、大きな期待も寄せられている。

平成23年3月に野球部が念願の甲子園出場を果たすなど運動部や文化部等の活動も盛んで、地域の元気を創出する役割も担っている。しかし、少子化の影響により、長らく1学年8学級だったが、現在は6学級となっている。（平成30～31年度は県の事業により1年生のみ7学級）

平成25年度～27年度の卒業生の国公立大学合格者は105名～109名であった。東北大学合格者は4名～11名、医学部医学科合格者は2名～7名で推移している。また、平成15年度から平成29年度までSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受け、科学的リテラシーの向上と国際性の育成に取り組み、平成29～30年度は県の探究活動等実践モデル校事業の指定を受け、主体的・対話的で深い学びの視点から授業の改善・充実に取り組んだ。

[課題]

近年は少子化による高校受験者数の減少から志願倍率が低い状態が続いている。その結果、入学者の学習意欲や進路意識の差が大きくなっており、今後、東大・京大や医学部等の難関大学を含めた進路希望の実現を図り、地域の期待に応えるためには、学力差や多様な進路希望に対応した取組を充実させることが必要である。そのため、個に応じた指導方法や指導体制を整え充実させること、長年蓄積してきたSSH事業のノウハウを生かし発展させるカリキュラムを構築すること、そのカリキュラムを生かして探究活動を重視した指導を充実させること等により、本校の教育目標の実現を図り、地域の期待に応えていくことが大きな課題である。

② 学校を取り巻く将来の状況の予測

少子化により、本校への通学圏内である大館北秋・鹿角地区の中学校卒業予定者数は減少が続いている。第六次秋田県高等学校総合整備計画における大館地区の統合計画は完了したが、少子化による生徒数減少の影響は今後も多方面に現れることが予想される。

しかしながら、地域の拠点校として本校に寄せられている期待は大きく変わるものではなく、むしろ、グローバル化していく社会に積極的に対応できる人材育成、地域や日本、世界で活躍できる人材育成への期待は高まるものと思われる。そうした本校の役割、使命を考えると、教育活動の質的な充実を図り、地域の期待に応える取組を一層強化しなければならないと考える。

③ 目指す方向性や学校像

[目指す方向性]

高い志を持った生徒を育成することが本校に課せられた使命である。社会の一員としての自覚のもとに、地域・日本を自分が支えるという気概を持ち、グローバルな視点で多様な見方・考え方のできる生徒を育てたい。そのために、文武両道を目指した教育活動の推進に努めながら、多様な生徒の個性や能力を伸ばすために「個に応じた指導」の充実を図る。また、キャリア教育の推進を通して生徒の将来の社会的自立を目指した教育活動を推進し、社会を生き抜く力や豊かな心、生涯にわたり学び続ける意欲を育て、国際化、情報化など社会の変化に対応する力や創造力、思考力・判断力・表現力等の育成を図る。

[目指す学校像]

伝統校として脈々と受け継がれてきた校風や学校行事等を引き継ぎながら、時代の変化に柔軟に対応した特色ある教育活動を展開しつつ、教育成果を保護者や同窓会、地域社会に問い評価を受け、更なる改革改善につなげる自主的・自律的な学校を目指す。

また、本校の持つ教育力を地域に公開し、地域の文化活動の活性化に寄与するとともに、地域の拠点校として近隣の中学校や高校との連携を図り、地域の教育力の向上に努める。

④ 5年間で達成を目指す具体的目標

項 目	目 標	H 2 8	H 2 9	H 3 0
大学入試センター試験全国平均以上の科目	全科目	14/16	14/16	10/16
国公立大学合格率（合格者数/センター試験受検者数）	55%以上	51.4%	56.7%	54.3%
医学部医学科進学者数	5名以上	3名	4名	0名
難関大学（東大、京大、東北大等）進学者数	20名以上	6名	8名	9名
H31以降：難関大学と医学部医学科を合わせた進学者数。	20名以上			
進路希望達成率[前年(2年次)11月比]	70%以上	52.8%	56.3%	60.4%
実用英語技能検定2級以上合格者数 (2年次 準会場実施分)	50名以上	46名	44名	45名
H31以降：2年次までにCEFR B1以上	20%以上			
中学生対象特別講座の開催(H29年度で終了)	年2回以上	2回	2回	

具体的な取組等

① 質の高い授業実践が本校教育活動の柱であると捉え、授業力の向上を図る。 そのために

- ・ 近隣の中学校や高校の教員を招いて校内授業研修会を開催する。
- ・ 先進校視察や予備校研修に参加して、成果を共有し還元する。
- ・ 日常的にオープンな授業の公開を行う。
- ・ 教育相談活動の充実を図るとともに、生徒に関する情報交換会を適時に行い、生徒理解と生徒の学習意欲の向上を図る。

② 高い志を持った自立した学習者を育てる。 そのために

- ・ 望ましい勤労観・職業観の育成とともに、学習への動機づけを強化することを目的として、企業や大学、研究所等の訪問、先進校や海外の高校への派遣、学部・学科研究等を早期に行う。
- ・ 外国の高校からの留学生を受け入れたり、外国の高校との交流を行うなどして質の高い国際理解教育の推進を図り、世界にはばたこうとする志を育てる。
- ・ 同窓会員や地域のリーダーを招聘しての講演会を開催し、社会における役割の自覚を促し、積極的に社会貢献しようとする志を育てる。

③ 進路希望の実現を図る。 そのために

- ・ 「難関大進学プロジェクト」や「医学部進学プロジェクト」などの進学希望達成に向けたプロジェクトの検証を行い、更なる充実を図る。
- ・ 県内外の進学校との連携を通して教員の進路指導力の向上を図る。
- ・ 生徒の進路希望実現の取組を組織化し、指導の均一化と質的向上を目指す。
- ・ 保護者や同窓会、地域の教育力の積極的な活用を図り、幅広い教養を身につけさせ、多様な見方・考え方を育てる。

④ 学校教育活動の公開を積極的に進めながら適切な学校評価を行い、説明責任を果たす。

そのために

- ・ 中学校教員等を対象にした公開授業や、本校の教育方針、教育活動についての説明会を実施し、教科指導、生徒の実態等についての理解を得る。
- ・ 各教科単位で高校入試の分析を行い、中学校教員等を対象とした報告会を開催する。
- ・ 種々の学校行事を地域に公開し、教育活動の理解に努める。
- ・ 学校評価を適時適切に行い、教育活動の最適化を図る。
- ・ 学校・家庭・地域社会の連携協力体制を強化するために、保護者や同窓会等の学校関係者や地域住民の意見や要望等が適宜学校に届くシステムを確立し、教育活動の改善の取組を組織的に行う。